

# こころのまじ

## 縁起の巻

### 前篇

清淨光	一
智慧光	七
不斷光	九
後篇	
縁起因門六義	二一
生産規定の六義	二七
因門六義	三一

### 清淨光

清淨光已下の四光明は個々の心機に直接に感應して適せざる處の素質を脱却して關係的に佛意と相應し融合し靈化する機能を有せる光なり。

一切衆生即ち個々の心性は其根底に至つては悉く皆な本體の法身にあらざるはなし。故に自心本清淨にして萬徳恒沙の聖徳を顯現すべき性能は本自ら豫備せざるものなし。然れども心理に必然的に惡素質の覆ふ處あつて是を顯現する能はず。

靈光は此自性清淨を顯はすべき功能あり。自性とは彌陀の法身の分個、彌陀の光によつて彌陀法身より賦與せられたる自性清淨を顯示す。

清淨光は衆生心理の感覺に與る光なり。此光によりて自己の感覺性の眞面目を發見するを得。感性とは眼耳鼻舌身意の六根なり。衆生は此六識の眞面目を認識せず、顛倒して本來の自性を他の外物と認めて、反つて他の六塵の妄想分別の影像を自己の心と想像し、外界の誘惑によりて其心象を染汚して、六塵の染垢襲ひて其感性を眩惑

し、終に自己の眞面目を遺失し、忘却するに至る。哀むべきにあらすや。

感覺性の眞面目、自性清淨、彌陀法身の賦與とはいかなる體なるや。感性の本性とは先づ其心の體を明し後に清淨の義を示さん。

賦與の心性とは心體の包容せる十方微塵の刹土皆我心性に攝して周からすと云ふことなし。虚空尚を心中に在り。十方豈に心性の外に存せんや。楞嚴經に曰く「色身より外山河虚空大地に泊まで咸是妙明真心の中の物なり」と。又曰く「當に知るべし。虚空も汝が心内に生ず。猶し片雲の太清裏に點するが如し。況や諸の世界の虚空裡に在るものに於てをや。又云く「空の大覺の中に生ずること海の一漚の發するが如く有漏微塵の國皆な空に依つて生ずる處の……」心性の曩斯の如く廣大なるのみならず其性質は明鏡の如くに極めて清淨なる交徹靈明の虛靈性なり。見聞覺知萬象徹照して大千圓に一視すべき性能なり。

妙宗疏に「然るに若し心性塵刹を具せずんば則ち佛に應現の理なく、生に感見の功なからん。

個々斯の如きの心性は本自彌陀法身より賦與せられたり。

三昧發得し、此清淨光に依て自己の法身を發覺することを得。心性未だ清耀靈に徹照せず起行によりて心機開展して清淨光を得る時心眼即開して大心海中の萬象を見ること、金烏已に東に昇るときは炳然として萬物を視ることを得るが如し。

此感性を鏡に比せば天然は玉璞にして心機發展せしは琢磨したる寶珠の晃曜焜耀として表裏に暢發するが如し。

一たび心機展じて清淨光を見れば感性究めて交徹清淨光明態となるが故に六根清淨なるを得。

自ら一心に念佛して自己の心性彌陀の大海の一浪波たるをしり、この波浪止むときこの感性清淨にして彌陀の大圓鏡の外に我あることなし。

此光を被りてよりは見聞覺知として眞覺ならざるはなし。色聲香味觸として清淨法

ならざるはなし。此光に對せば萬象徹照して大千界を一視す。一心念佛して清淨光と相應する時は六根清淨の功德を得。

六根清淨とは感性清淨なり。此清淨光態の感性には空間には四方に圓照し、時間としては三際に徹して一時一念に十方三世を照す光なるが故に、此光は感覺的に阿彌陀佛を見たてまつるなり。此中の一切の萬象は肉眼を開かずして清淨なる感性に十方廓然として萬象透ること莫く、三千圓に照す。青霄に目を擧て視よ。清虛に無數の星界は悉く是眼裏の塵なるを。

一心に念佛し清淨光に感性を清淨にして見よ。自己の眞面目顯はれて大千の一切の衆物は歴然せざるはなし。彌陀より賦與せられたる此感性尙不可思議、且らく日月太虛の遠き其幾萬億里たるを知らざるべし。目を擧て直に視るに非ずや。意の縁する所、其の疾く之を俛し仰ぐ間に再び四海の外を撫せるに非ずや。天然已に然り。況や精練なる感性に於てをや。

感性清淨なる時は十方の大千悉く眼識に交徹し圓照す。耳鼻舌身も理亦復然り。法華に清淨身を得れば淨瑠璃の如く衆生喜び見るが如し。其身清きが故に大千界萬象も悉く其中に映現すること、淨瑠璃珠に萬物を現すが如し。楞嚴に淨塵幻化虛妄なるを相と稱しこの妙覺明體、常自瑩然として十方を含吐し、業に循て發現す。故に是體を得るものは現せざる處なし。

阿難と大眾とが佛の開示を蒙りて、身も心も蕩然として罣碍するものなく、各々自ら知る、心性は十方空間に徧して萬有を包容するを。反て父母所生の身を觀ること大虛の一塵か或は巨海の一漚の起滅従ふ所なく、了然として礙られざるが如し。

此理を證し清淨光を得る時、十方法界洞然とし清淨なり。此時に心を擧て彌陀の清淨法身妙色莊嚴を感ずるとき明鏡を執つて自ら面像を見が如し。大經の無量壽佛大光明を放ちて普く一切の諸佛世界を照したまふ。一切の萬物沈没して泥濘として大火を見が如し。彼の佛の光明も亦また是の如し。相好照耀せずと云ふことなし。

五

また無量壽佛の大音はあらゆる世界に宣布して衆生を化したまへるを聞たてまつる。無量壽佛を見たてまつるに威徳巍巍として山王の如く高く一切の諸の世界の上に出たるが如く相好光明照耀せずといふことなし。

阿彌陀經に阿彌陀佛今現に在して説法したまふ。また阿彌陀佛もろくの聖衆と共に現に其前に在ます。此光に應せる感性は清淨なること磨きたる明鏡の如く表裏に暢發す。よく鍛錬せる鐵が利刀となるが如し。琢磨せる珠玉の如く瑩光晃耀明淨なること日月の如し。蓮華の如く六塵に染汚せられず。清虛の如く無限なり。

### 智慧光

眞理の歸する處。常識已上の智。吾人眞正の安立を得んと欲すれば常識已上に到達せざるべからず。順逆兩境に際して寂靜安穩の心地を得んと欲せば常識已上に達せざるべからず。常識は決して不動の基礎を與ふるものにあらず。婆羅門に神智と俗智とを云ひ、究竟安心に達するは神智によると。

佛敎に有漏智と無漏智と。安心には無漏智。プラトリーの吾人の靈魂に二性あり。高等なるは觀念世界に關係し其下等なるは感覺世界に關係すと。甲乙は感覺世界。甲は觀念世界。乙は俗智によつて甲は神智によつて識る。乙は常識。甲は常識已上。常識極まる處必宗敎妙玄の境界に入るに如かじ。

七

ソクラテス百方思索探求の極り世人は皆自己の無智を知らざれども自己は自己の無知を知ること、これ世人より超越せる所以と。自己の行爲は「ラーモン」の命令によると自覺す。

### 不斷光

意志を解脱靈化する光。不斷光の本質は神聖正義、金剛智慧能。

惡素質は世俗情操、世界的動機、主我幸福主義斯の如きの志操は聖靈菩提心に違す。聖靈菩提心とは願作佛心。神聖靈化の欲望。度衆生心。(法性平等。神の平等の慈悲心を自己の意志として同靈化せん)願往生心。(真理の歸する處を知りて衆生と共に終局目的にまた一切をして最終の靈福の爲に)この意志の願望なり。

世俗的情操は其志操にして人情的人倫的志操を第一義とし、高く神聖的に對する志節真理に對する情操なく、道義の如きはあしからざるも、志操に至つては世俗野卑なるを免るゝ能はず。無上道志操を以て挺然として屈せざる如く、いかなる境遇にも此志操を變する能はず、人間無上の名譽光榮も威權もこの無上道のためには志節を換ふる能はず。

牟尼修道の途王舍城にかゝる。頻婆沙羅王沙門を近くに詣ふ。吾國位を以て子に與へん。詣ふ、之を誥せよと。太子挺然として志節を變せず。何かは此靈魂をけがさんとの志操なり。肉體や名譽を以ての人情的情操に非ざるなり。

其情操一に無上道を志求し、彌陀に對する情操には命も名譽も何も一として願ふことなき志節なり。

世界的動機とは世間的欲望にして其意志の望む處は感覺的或は名譽權威、斯る意志を超越して、超然として獨り朗かに意志高く天に聳へ、無上道を志求す。我をしり、意志の欲望を知るものは唯光壽あるのみ。

意志は發動的なるを以て、常に至上尊の聖意の實現を祈つて止まざると同時に感情にはかの實現の聖旨に對して感謝の感情をすつることなかれ。感情は受動的なるを以てかの受つゝある恩寵に感謝したてまつるなり。然れども意志が波羅密多としては常恒不斷の進歩に非ざればいかでか發達すべけんや。念々に新に斯く實現し念々に感謝し共に離るべからざるものなり。

神聖正義恩寵と一切能とは至尊の聖意と仰ぐべし。

法藏曰く、「吾れ誓ふ佛を得んまでに普く斯願を行じて一切の恐懼の爲めに大安を作さん。たとひ佛有りて百千萬億無量にして大聖の數恒沙の如くならむに、一切の斯らの諸佛を供養せんよりは、道を求めて堅正にして卻かざらんには如かじ。」

道とは無上道。圓滿完全たる神の意志に靈化すべき道。最殊勝なる動機。

「たとへ無量佛土悉く嚴淨にして光明あるも我作佛の國土をして第一ならしめん。其衆奇妙にして道場超絶し、國泥洹の如くにして等双なからん。」高尚なる理想。

「我當に一切を哀愍し度脱すべし。十方より來生せんもの心悅清淨にしてすでに我國に到りなば快樂安穩ならしめん。」

人類をして最圓滿に安寧ならしめんとの希望。宗教及び道德倫理の目的ここにあり。

是肉慾幸福主義の快樂にあらずして人類精神の最圓滿に發展し最終の目的なる精神平等なる至眞至美の靈界を精神に顯したるなり。

「幸くは佛信明したまへ。是れ我が眞證なり。願を彼れに發こして所欲を力精せん。

十方の世尊智慧無碍なり。常に此尊をして我が心行を知らしめん。たとへ身を諸の苦毒の中に止くとも、我が行は精進にして忍びて終に悔いざらむ。」

久遠質成の彌陀、近く人類を攝取し救済すべき軌轍を顯さんが爲に法藏の應身を示して客體の至尊の聖意を顯はし玉ひたるなり。

十方世尊智慧無碍とは十方數多の佛在すが如くなれども實を剋して論せば盡十方無碍光の法藏の本佛にして常恒永遠に一切を攝取し救済するところ。

是らは靈化の意志の模範と見るべきものなり。是の不礙光の光益としては此の法藏の因地の志願は悉く靈化の意志と相應す。

自己の意斯の如く靈化せしや否を自ら檢すべし。法然上人の門弟二人罪科せられ、上人の流罪は一向專修興行の故なればとて門人等歎きて、老いの御身、遼遠の海波に赴き玉はゞ御命安全ならじ。願くは一向專修を停むべき由を奏して此罪を通れむ。と、勸めたる奉れば、上人のたまはく、流刑更に恨みとすべからず。精神已に淨土に安住す。此肉何の慮る所あらん。洛陽の化益年久し。邊土に田夫野人をすゝめんとの年來の本意を遂ぐ。ひとへに是朝恩なりと。世間の機嫌の爲に佛祖の素意にとらん。我たとへ死刑に處せらるゝとも念佛の弘通の事はすばあるべからずとの至誠心を見るべし。

世俗的情操。常識的人倫を根據として安立せる情操を云ふ。人道に超越して天を根據とせば宗教的なり。

超世俗情操は死生の爲にも神の意志に安立して變ぜざる志操。

孔子が自己を擧げて天に托し自己の爲す所は天之をなさしむと信ず。天徳を予に生せば桓魋それ予を如何せん。天の斯文を喪さざるや巨人それ予を如何ん。

死生の爲めにも神の意志に安立して變ぜざる志操。ソクラテス死刑の宣告を受けて後ハーモセニスに告げて曰く、何故汝は世界に於て生活を繼續するものよりも、此世に別離を告ることを自己にとりて最善なりとする神の命を驚愕なすかと云ひ、從容和平死を見る故郷に歸るが如くなりき。

孔子が非常の時に生死の岸頭に立つ時に常に天を呼び、天に自己を托せること自己の爲すところは自己之を爲にあらすして天之をなさしむと信す。

孔子、ソクラテスの天と云ひ神と云ひ、自己を擧げて托すべきものありて之に安立せりと云ひしも、その神なるものが譚に十二の光明をもて衆生に關係せんとの深奥なる意義は未だしらざりしならん。

超世俗情操とは榮辱生命利害の爲にも泰然として動かざる志節情操なり。宇宙の本體に徹照し萬物の主たる無量光壽に依屬し安立せる情操は、現界を全くしての榮光も以て顧みるに足らざるを認めん。法藏の因位、國と王と位を捨て無上道を求めし如き、

悉達が無上道を求め志節の堅固なること、淨飯の恩愛耶輪離難及び百千の愛を割つて涼々たる。又正覺の成道に先だちて廢王人天の欲と畏とを以てするも悉達が志節を換ることなし。

國と位と身命を棄て無上道を究め如何なる榮耀も名譽も威力も娛樂も未だ畢竟依とするに足らず。

若し人にして高等なる宗教意志なかりせば其怖望する所世の威權榮華娛樂名譽の此世界の外にあらざるべし。

超然として自己の榮利と生命を犠牲にしても、神につかへこの道のためにたをれんと決定する志氣なるものにあらす。

意志安立の基礎を常識に立つるものは世俗情操にして常途の人道説にして未だ常識已上に安立の立脚地あるを知らざるなり。孔子の天、ソクラテスの神の如きは未だ宗教としては高等に進化したる明暉なる光明なるやは識る能はず。

世俗の中の出世、伯夷が彼の西山に登つて其微を採る。暴を以て暴に易ふ。其非を知らず。神農虞夏忽然として没したり。我れ安くに適いて歸せん。干嗟徂かん命の衰へたる哉と、伯夷叔齊が清麗潔白なる志節雪の如し。然れども前途の光明の在を認めず。故に自己の運命の薄弱を嘆いて死せり。

司馬遷が伯夷叔齊が潔清にして餓死し、顔回が學を好むも貧にして天死す。盜跖が暴戾なるも壽。近世横行不軌にして専ら忌諱を犯すもの、而も身を終るまで逸樂窟厚累世絶へず。或は地を抉つて之をふみ時ありて然して後に言を出す。行くに徑によらず。公正に非ざれば憤を生せず。而も禍災に遇へるもの擧げて數ふべからざるなり。予甚だ惑ひぬ。儻くば所謂天道是耶非耶と。

常識を標準として制裁倫理の根基とせるを世俗的情操と云ふ。平々凡々の情操よりは是らに對して天道是耶非耶の嘆を發せざるを得ず。

邪にして惡をなし人倫に反するは獄。我愆にして惡をなし倫理に反すは鬼。理にくらく黙然にして横行なるは畜。憍慢にして鬪争を好むは修羅。

倫理を全うするは人。高潔にして精神を研ぎ正しきは天。志氣高潔にして高く物表に出で、眞理の靈界を理想とするものは聲聞。志操高く塵を出で天真を自ら認て理想するものは縁覺。念佛者彌陀を理想とし情操高く彌陀の如く法藏の如くなれ。

無上菩提心

堅固の信心即ち決定心、決定心即ち無上之心、即ち相續心、即ち淳心、淳心は是憶念なり。金剛心とは即ち願作佛心、願作佛心は即ち度衆生心なり。度衆生心は即ち是衆生を攝取して安樂淨土に生せしむる心なり。幸福主義を排す。

論註に彼の安樂國土に淨土に生せん願するものは必ず無上菩提心を發すなり。若し人無上菩提心を發さずして唯かの國土の安樂無間なるを聞いて樂の爲に生せん願するは亦當に往生を得ざるべし。是故に自身住持の樂を求めず、一切衆生の苦を抜かん欲すが故に。住持樂と云ふは曰く「彼の安樂淨土は阿彌陀如來の本願力の爲に住持せられて受樂ひまなきなり。

靈化。凡そ回向の名義を釋せば、謂く、己が所集の一切の功德をもて一切衆生に施與して共に佛道に向はしむ。巧方便とは謂く、菩薩願すらく己が智慧の火をもて一切衆生の煩惱の草木を燒かんと。若し一衆生として成佛せざることあらば我佛に成らじと。然るに衆生未だ悉く成佛せざるに菩薩已に自から成佛せんは、譬へば火燭をもて一切の草木をつんで燒て盡さしめんとおもふ。草木未だ盡ざるに火燭すでに盡んが如し。其身を後にして他身を先にするを以ての故に方便と名づく。此中に方便と云ふは、謂く、作願して一切衆生を攝取して與に同じく彼の安樂佛國に生せしむ。彼の佛國は即ち是畢竟成佛の直路無上の方便なり。菩提門と云は菩薩是の如くよく回向成就を知らば即ち能く三種の菩提門相違の法を遠離す。何らか三種。一に智慧門に依て自樂を求めず、我心自身に貪著するを遠離せるか故に、その知進守退を智といふ。空無我を知るを慧といふ。智慧は眞理、神の意志により主我幸福主義は劣神態なるが故に脱却すべし。智に依るが故に自樂を求めず。慧によるが故に我心自身に貪著するを遠離す。

二。慈悲門に依れり。一切衆生の苦を抜いて無安衆生心を遠離す。苦を抜くを慈と云ひ、樂を與ふるを悲と云ふ。

三、方便門に依る。一切衆生を憐愍する心なり。自身を供養恭敬する心を遠離するが故に正直を方といふ。外己を便といふ。正直に依が故に一切衆生を憐愍する心を生ず。外己によるが故に自身を供養し恭敬する心を遠離せり。是を三種の菩提門相違の法を遠離すと名づく。

(生産門) 緣起因門六義

天則秩序に統一せられたる相待規定、即ち因緣より生ずる緣起の理法の、即ち生産の理、因門六義とは能生の種子なり、

- 一、空有力不待緣 二、空有力待緣 三、空無力待緣
- 四、有有力不待緣 五、有有力待緣 六、有無力待緣
- 1、刹那滅の義。刹那滅に由るが故に、即ち無自性を顯す。是れ空なり。此滅に由るが故に、果法生ずることをう、是れ有力なり、然此謝滅緣力に由るに非ざる故に不待緣と云ふ。
- 2、俱有義。俱有に由が故に方に有即ち不有を顯はす。是空の義也。俱の故に能く有を成す、是有力也。孤に非ず待緣なり。
- 3、是待衆緣の義。無自性に由るが故に是空なり因不生緣生の故に是無力なり。即

此義に由が故に是待緣の義なり。

- 4、決定義。自類不改に由る故に是れ有の義。能自ら不改而果を生る故に是有力の義。然に此不改緣力に非ざる故に是れ不待緣なり。
- 5、引自果義。自果を引現するが故に是れ有、待緣。方に生ずと雖も然も緣果を生せず、是れ有力の義。是義に由が故に是待緣義なり。
- 6、恒隨轉義。他に隨が故に無るべからず。緣に違する能はざるが故に無力。此に由が是待緣なり。

六義は正しく緣に對する三義。

- 一、因力不待緣。全體生故、緣力を雜ざるが故に、
- 二、因有力待緣。相資發故。
- 三、因無力待緣。

全く不作故に因が緣に歸するが故に、  
 一因中二義謂く空有の義。各三義あり。  
 待緣とは増上と無間と緣々。

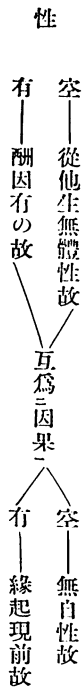
増上とは例せば六根能く境を照す識を發す増上力用あるを諸法生ずる時障礙を生せず、増上緣。

無間緣とは心心所法次第無間相續して起るを云ふ。

緣々とは心心所法が緣に託して生、還て是自力の所緣虛名くるなり。

空有二義。謂從他生、無體性故、是空義。酬因有故。  
 有義とは互に因果と爲る義に約して説く。即一法他の因と爲る時、この六義を具す他の果と作る時即ち唯二義あり。是故六義唯因の中に有り。

空は無自性の故に、有は緣起現前の故に。



一有力不待縁 全有力

用三二有力待縁 有力無力

三無力待縁 全無力

六義融攝

(一) 總相。六義即一因。(二) 開一爲六。別相。(三) 六義同名因。同相。(四) 六義不相知異相。(五) 由三此六因成。成相。(六) 六義住自位。壞相。

法界縁起主伴を具足して無盡縁起、

體の空有に由て相即門、待不待同異門。

力の無力に由て相入門。

斯らの義に由て毛孔刹海事を容るゝなり。

因即ち種子の性に二性、

空二時間的に生滅轉變は空性が力に發せられて。

萬物能生の因に二方面あり。空とは消極的(無自性)の方。陰性。雌性の如き。雌性は所動的、受容的にして。心理には感性即ち所動的の如き。女性は種子は能發にあらずして受容的なり。

心理には感性にして所動的、受感性は外界より受けて内容動機なり。

有二有は生滅の中に一定の自性を相續するは有。自性自己に有して、陽性なり、男性なり、生物の能生の因としては發生的なり。能く發生して雌性に合して。

心理の理性にして、能動的、自己に本有の伏能ありて之を發展す。内より外へ發せんとする心理機能なり。

萬物空有の兩性相關して成る。

生殖作用の如き原始の生物は雌雄の體を別に分れず、自ら一個體に雌雄兩性を具したりしが、進化して雌雄の別をなすに至る。生殖作用は雌雄合體して一の生命を造化

するは同一體の分業に外ならず。

精神作用に於ては個體に理感二性を具有す。

兩性の能力の異。雌性の能用は自發生に非ずして。受容的養育的なり。性としては雄性より受たる種子に合體して核を完成し、また之を胚胎して養成する能力あり。兩性能相待て始て能生の種子は男女相合して個體の作用なり。

不待縁、待縁、とは能生能養の性能自己に有するも、外界より之を養ふべき質料を仰ざるべからず、之が助成規定によらざるべからずと云ふ。

1、の自性空にして之を發動する力あるが故に生じ、生ずれば滅し、其中間に異あり、之に於て變易の理法あり。

2、の已に受たるを合して之を分娩養生する應化作用あり。

3、4、有性不改、能發生して自己發生増長する一定したる自性を有して、

5、自性を分類するも類似を遺傳する、

1と4によりて内容の變易する中に形式の不改性を保存す。2と3によりて種性を遺傳する中に應化の理法あり。3と4によりて其性能に對して外縁の適不によりて繁殖の能となす。之適者生存に當る。

### 生産規定の六義

生産——天則秩序——因縁——相待規定即因縁關係に由て萬物を生産す——縁起因門——生産規定六義。

因とは生物に本能的に有する性能。能生の故に種子と云。

一、空有力不待縁 變易の義。また刹那滅の義、

生物の性能は無自性にして念々生滅し新陳代謝して速疾に變易す。空とは本性一定したる質にあらざるが故に勢力によつて發生し進化し變化すべき性にして、外縁の爲に生滅變易するに非ず自性なり。是れ進化説の變易の法と相當す。若し自性一定し確

立せば進化すべきなし。無自性の故に種々に變易し個體に於ても生住異滅し累代には種々に變易す。精蟲變易して人となり、アミンバは進化して高等動物となるが如し、本性空にして發達する勢力を有して縁を待たず。

心靈開發に於ても性空にして十界何れにも成りうべき勢性能を有す。若し凡夫にして自性ならんか何ぞ成佛をうべき。性空の故に理感二性空にして種々に變易するなり

## 二、空有力待縁 俱有の義

無自性の故に發達して能生の性能を有すれども相待規定の萬有は孤立すべきに非ず必ず因縁の關係を離るべからず、必ず縁を待たざるべからず。

因果俱有。因と果との關係は相續して時間的に聯結を斷つべからず。能生と所生との俱有、肉體に云へば能生の華と所生の核との聯絡俱に（ ）有す、縁を待て成るも俱有にして自己は自己なり。

## 俱有

## 三、空無力待縁 待縁の義

縁起の萬有は自性空にして因のみにして生産すべき能なく必ず相縁る縁を待たざるべからず、因縁相待して能生の功をなす、故に待縁なり、之に進化説にては相方互感應化して所生の果は應化す、第二第三は進化説の應化の理法に當る。

## 四、有々力不待縁 決定の義

因縁相關の中に有は自性を保存する勢力ありて果を生ずるは縁を待て然るに非ず。

進化説の自性類似、遺傳の理法の如し、精神的にも積極的に自性を

有有力とは、有は自性を改めずして保存する勢力あり、縁を待たざるなり、自己の性果を生ずべき性能本有にして縁によりて然るに非ず、

進化説の類似と遺傳に相當す。

## 五、有々力待縁 引因果義

自性ありて自己の果を引現するが故に有性なり。待縁生なれども縁の果を生せず故

に有力なり。然れば相由の故に待縁なり。

## 六、有無力待縁 恒隨轉の義

よしや他に隨ふて居るにせよ無なるべからず縁との關係を離るべからざる故に單獨には無力なり、此に由るが故に待縁なり。

進化説の生存競争の適者生活に當る、いかに發達すべき性あるにせよ之を資くる境遇の縁に順つて恒に隨て轉せざることを得ず。

六義は之を世界進化の理に於ても生物生産の理に於ても教育にもすべての生存に世界の生活にも生物個體の生活にもあり。

空有二性は若し之を二性に分別せば空は感性にして經驗せざれば白紙の如し、本自性なし。有は理性にして本有の能動性なり。

## 因門六義 (註。第一第二は缺)

第三空無力待縁。是れ待業縁の義。何を以ての故に、無自性に由るが故に是れ空なり。因不生縁生の故に是れ無力なり。即ち是れに由るが故に是れ待縁なり。

本因無定相の故に、自體是れ無自性。因縁の事法然るべきが故に空となす。

生物進化の説に生命の原形質は炭酸水窒等の元素より原形質を假る、原形質の生命を向上し聯續せんが爲めには、必ず他より元素の資質は供給せざるべからず、而して定性なきが故に、自己に因の自體を有するも、助成規定によらざれば自種の結果を成すものに非ず。助成によるが故に待縁。

梁論に觀因縁とは此の種子に別の因縁を觀するに依て、方に復た果を生ず、是の故に一切時に非ず、一切生に非ず、是時に若し因あれば是時因生することを得、是の故に順に生せず、若し因を觀せずして因を成せば則ち一因一切果の因と爲さん。因縁を觀じて成するを以ての故に因となることを得ず。進化説の應化作用は他の異性と感應



して變作す。

唯識論に待衆縁、謂く要す自の衆縁の合するを待つて功能殊勝なる方に種子と成る。此は外道の自然因にして衆縁を待たず頓に果を生ずと執するを遮す。所待の縁は恒に性あるに非すと云ふことを顯はす。故に種は果に於て恒に頓に生ずるに非す。

#### 第四、決定義。有々力不待縁。

決定義何を以ての故に、由自類不改故是有義なり。能く自ら改まらずして而も果を生ずるが故に、是れ有力の義なり。然も此不改、縁力に由るに非ざるが故に、是れ不待縁の義なり。生物進化には決定自類不改とは生物が原形質が前代より其子に遺傳し、有とは自類似を遺傳する義。

一切の生類種々無量なるも各其原形質より次に類似せるものを遺傳す、種子に先きには無自性の故に變易することは、總じて廣くは無定性にして、種々に變易するも、形式の大體に於ては、一定して遺傳する中にて、

精神には諸法の種子となす所の善惡無記の三性決定するを等流因と名づく。是の故に所生の現行の諸果三性歴然たるを等流果と名づく。有爲の諸法は皆な名言種子より生ずるが故に、善法は必ず善の種子より生じ、不善の法は不善の名言種子より生ずる等流の因果體性決定して三性濫れず。若し自類改變せば即ち是れ無の義にして、定有の義に非ず。三性決定して改まらざる之を名けて有の義となす。

有力——種子に決定の體ありて果を生ずるに力あり。此力能は是れ因の功能。因種の處に既に自果を生ずべき機能を具す。故に縁をからずして即ち自果を生ずるを不待縁となす。地論には縁不生自因生の故に。雜集の自種有の故に不從他の句あり。性決定するが故に此義を成立す。

決定とは此決定に依て一切より一切を生ずることを得ず。因果並に決定せり。若し此果の種子なれば此果を生ずることを得。是の故に決定と名く。

#### 第五、有々力待縁 引自果の義なり。

何故、由引自果是有義。雖待縁方生。然れども縁の果を生せず。是れ有力の義なり。此に由るが故に是れ待縁の義なり。

決定の事に付て自類不改是有の義と。因即ち自性に自己の類似を遺傳すべき能力を有することは縁を待て初めて爾るに非す。自己の原形質其ものに自類不改に等流し、即ち遺傳すべき力あり。自分が自己の原形質は類似して造化すべき塑摸の如くにして之を化するは天則の理性なり。

引自果——色法の種子は必ず色法を生じ、心法を生せず。心法の種子は必ず色法を生せず必ず心法を生ずる別々の功能因果歴然たり。引自果とは名言種子取果の能ありて以て自果を引くを今の義となす。自果を取て縁果を生せざるに名けて有力となす。因自果を引く功能勝れたるが故に。

因是れ有力にして而して復た縁を待つ。親因疎縁和合して生ずるが故に。地論に無因より生せず、隨縁有の故に。唯識に別々の色心等の果に於て各々引生ずる方に種子と成る。

#### 心理に

決定——有々力不待縁

理性、即ち形式動機、能動力、決定とは、理性は自性不改にして自ら決定して、有力とは能動力にして自ら能く物に對して斷判決擇に任ず。

理性は能動なれば本より外界の感覺によりて有るに非ず、また形式の動機となりて物を判斷す。

引自果——有々力待縁

感性、積極的方面。感覺が外界の物の刺激によりて之を受容して感覺を動し、感覺は物に對して受感性なるも、之を能く感覺し、また知覺する功能あり。故に有力なり能く内容を充實せしむ。

宗教の三昧を發得し相好光明等を感じし心情解脫融合し、名言また感覺的表象によ

りて客體の内容なる恩寵等の聖徳を悟り、たとひ待縁即ち客體の表象等によりて内容動機として（ ）なるも其結果は自己の内容を成就せしむるにあり。故に自果を引く。

縁を待とは客體との關係によりて聖靈を感じる如きの縁を待たざるべからず。此感應交渉の作用によりて自己の内容を充たしめ、融合安立等のすべての内容を供するものなり。

またはれに由りて活動の動機となる。即ち如來の内容なる神聖正義慈悲等を感じその恩恵に報ひん爲めに宗教的活動をなすに至る。

#### 第六 有無力待縁 是恒隨轉の義

何を以ての故に、由隨他、故に、不可無不能違緣故無力用即由此故に是れ待縁なり。進化説の適者生存に當る。すべて生物は生存競争の場裡に於て地理にしてもまた時候にしてもすべて生存に適する處には益繁殖し適せざれば自ら滅滅するの天則理性。

また因果律に規定せらる、自己の内性にはいかに發達すべき伏能を有するもいかにせん、其境遇に於て適せざる者はいかに生存力を退滅せらる。

待縁、是非とも縁即ち生存を資くべき資縁を外界に仰がざるべからず、待縁の如何によりて存亡と榮枯と分るゝ所以なり。

恒隨轉とは、生存は競争が毎に其境遇に隨て遷轉すること無力なり。すべての生物が生存の規定は恒に生存の適否境遇に隨ていかなる理由に限らず、其適する方面に隨て繁殖するが故に、其榮枯は一定すべからず。恒に循環す。

宗教的生活にしても亦た然り。

有||此は種子他に隨て運轉して念々相續す。治道起すに至て種子謝滅す。中に於て或は則ち現を生じ或は自類生ず。治道已來相續して息まず。是の故に恒と言ふ。種自ら立せず。要す所依あり。是の故に隨と云ふ。種は是れ有爲なれば念々生滅し相續して生起す。是の故に轉と云ふ。轉は生なり、運なり。隨他に由るが故に有なり、種子

事法自立すること能はず。要す所依あり、他方に依託して種子運轉す。此の義に依るが故に即ち有の義を成す。然れども助縁に違せず、因の現行を生ず。是れ無力の故に功を緣法に推して因を無力と云ふ。縁に託するに由るが故に即ち是れ待縁なり。

今日く、種子とは宗教意識の恩寵に化すべき靈なり。宗教靈の素質なり。初めは不識的に社會本能の中に恩寵的素質が含蓄し、精神の發達に隨て宗教的理性本能より、恩寵が即ち靈が宗教の種子なり。宗教的意識は信仰心即ち靈と靈化の恩寵とは即ち一なりとす。人が自然規定を脱して道德的自由に缺くべからざるは、人の理性的意志なると同じく、宗教意識の自由とは、自己を解脫したる恩寵による靈化の意志即ち靈によりて自由をう。

今有無力の有とは、人には宗教的素質即ち恩寵の素質と未定を有するは各人に惡の素質を有せると同じ。但し其の人々によつて恩寵的素質の程度如何あるのみ。

何れの人にも宗教的靈の素質即ち不識に恩寵を有せり。  
然れども未だ種子として伏藏し未だ顯動せざるのみ。

宗教的素質は已に動物の中にも社會本能を形成すべき形式已に豫備せりと。已に伏能とせるも顯動するに至らざるのみ。

恩寵の素質は伏能として豫備せるも之をして顯動ならしむるには、  
無力待縁||只だ遺傳として恩寵的素質を有せるも、只だ其れのみにしては、高等恩

寵の心理顯動を可能ならしむるは、之に對する種々の待縁即ち助成機關を待たざるべからず。此規定によりて遺傳素質の恩寵を高等に開發し、また解脫靈化を可能ならしむ。佛教に云ふ宿種と云ふ遺傳何れにしても自己に恩寵素質は豫備せるも、若し之を顯動恩寵に開發して向上するにあざれば、有即ち素質も更に價値なく、零と異る事なし。之に對する助成規定によりて、其關係を待たざれば獨り顯動となる能はず。

客觀的理性とは自己の精神生活に入り來りて顯動となることをう。

恒隨轉||顯動恩寵を受くべき種子遺傳素質または宿習と客觀的理性の顯動的恩寵と

は共に宗教意識を充分に開發々展すべきに必要な成分なり。遺傳素質即ち種子と開發助成機關と二者相ひ合して種子恩寵を圓滿に發達することをう。種子即ち素質は世界的に其素質を進めしめたるものなれば高等なる素質は顯動的恩寵が其の分量にも若しくは其相にも種子よりは遙かに勝ることに向上せざるべからず。

種子即ち靈の素質は遺傳恩寵生理素養と神的憧憬（）宗教的衝動となり、其衝動は種子を開發せしむる能力となる。

恩寵は遺傳即ち種子のみにあらず、是に對する客體たる如來の恩寵が、若しくは理體に、若しくは事相に、其無限の恩寵の中に、宗教的關係の機能の恩寵が、恒に攝取せられ神の觀念に刺激せらる。

其増上縁の活氣の中に、靈の生は息し、常恒に此恩寵との交渉によりて、消極的には自己の惡素質を脱却して、積極には一步々々目的に向上し、一念恩寵にあれば一念の佛、念々如來に在れば念々佛なり。

此に至て自己を零にし無力なり、罪惡なり、唯だ絶對の恩寵の増上縁に仰ぐにあらざれば、いかでか靈の生命をえん。此の増上縁の大氣中にあつて恩寵が顯動體となることを得。

終局目的に隨順して活動するは即ち顯動的恩寵なり。

第四、有々力不待縁。決定義

心靈の自由意志本質心靈天然の必然的因果規定(他の惡)

一、有自類不改 (三素質)

善——協神——靈的內容

惡——背神——惡內容——天然の規律より出て靈に對せばあるべからざる素質脱却すべき性質なり。

無記——( )神——天然的內容——天然規定機制的の個體

三性決定を爲因等流因、所生の顯動結果三性歴然たるを等流果。

二、有力——自不改——生果故

三、不待縁——縁力に由るに非ず他より加ふるに非ず。

汝が自己の徳の外神も汝に加ふる能はず。汝が精神は汝自らを改むるに非ずば他より汝を何如せん。

孔子曰く天徳を予に與ふ桓魋夫れ我を如何せん。

汝より出るものは汝に歸へる。

鳥の黒きは汝が果他の縁の染みたるに非らず。

三素質を顯動する性自果を生ずるは縁の力に非らず。キリストが汝が信仰汝を助く。

善惡無記三性

法界縁起の中に如來の性海に人に三性を分つに至る。同一の如來中の法界に於て何故に善惡無記の三性を分たざるべからざるに至るや、眞理に背するものの性と、未だ開發せざる天然の意志と、眞理に協ふとの三種なり。

一、天然的 二、背眞 三、協眞

初天然の内容を無記と云ふ。自然規定による生理機制的分子の集合、人間は一般生物と同じく自然律に支配せらる。

人には天然には高等に進むに隨て脱却すべき素質を有しながら未だ之を意識せざる劣態の意志自然的性は自然律に支配せらる。自己が劣( )天然素質は即ち劣態なる素質は脱却すべきものなることを意識せず、また自己は宗教的關係によりて開發し靈化すべき心理的性能が即ち如來の恩寵に關係すべき器具なるを想はず。

自然に必然なるは脱却すべきは素性なり。無記は人の天然の性質なり。善惡共に發展せざる機能なり。自然素質は脱却すべき必然の理性なるも、進んで恩寵との關係によるにあらざるよりは自ら獨り自然の状態より脱却すべきものに非ず。

惡の種子とは自然の規定より出たる主我幸福主義より、根本惡は主我に基き、主我は普遍的の人の性にして、進んで變態なる惡となり、また其素質は遺傳として傳はり

悪は普遍的人性と云ふも過言に非ず。遺傳素質の悪は益顯動態となりて發展して主體的の悪となり彌惡力を増長す。

悪は主我幸福の本能なれば此素質が有力にして益惡衝動となる。

不待縁とは世界には人を惡に誘惑すべきもの充滿し、道德に衝突すべき動機は何の處にも充つるも、然るに外界の事物其物が惡なるに非ず、いかに惡の誘惑物自己に圍繞せるも、人の素質即ち種子自己の之を感覺し自己の性格種子衝動にして始めて惡の動機となる。知覺が動機となるは意志の性格的性情なり。外界の刺激が惡の動機とならんには自己に惡の衝動即種子なかるべからず。自己に惡衝動即ち種子潜伏して刺激に應じて顯動的の惡となる。故に惡の衝動種子は自己に伏して顯動態となる。

すべての衝動は悉く惡なるにあらず、其衝動が道德に衝突して惡となる然るに惡慾望の生じ易きは惡衝動即ち惡種子なり。

病的惡衝動即ち肉慾等は其亢進するに隨つて習慣となり。受感性痲痺の爲めに益習慣的病的となる時は、己に惡衝動となれば遺傳的となる。惡の増進するには縁の刺激によるべきも己に種子即ち惡衝動となるはいかに道德的靈的の境界に對するも、彼等は感せざるなり。自性の種子に縁らず、全く縁によるならば、彼は神の觀念に恩寵を感ずべく道德心發動すべし。決して然らざるなり。惡種子惡衝動は或る境遇の爲めに顯動せざるも惡は依然たり。

惡種子は自己の内容本質として衝動となり、顯動態となるは他の刺激によりて始めて動きたるものに非らず。故に有々力不待縁と云ふ。

### 第三 善性恩寵

善の種子とは恩寵によりて靈化したる靈格の種子なり。人の恩寵の素質は遺傳の素定まり、人の恩寵と靈性は絶對主體の根底に基き、また代々の遺傳恩寵は宗教的衝動として善の種子は有力にしてよく顯動せんとす。

## 第一 絶對主體第 第二 代々の遺傳的恩寵素定

### 第三 恩寵は絶對主體の根底に於て理性として伏藏す。

人は恩寵の顯動として一度靈性開發し靈格とならんか即ち道德的情操として靈的衝動にしてこの活動をなすに至らん。

不待縁とは一度恩寵の顯動態と靈格とならんか、たとひいかに惡の誘惑の機關に圍まるゝとも惡の惡たるを意識するが故に其靈性即ち恩寵の性を變ずること能はず。また正に自己の内容本質にして己に靈格たらんか、たとひ外界の刺激によらざるも内面の根底たる如來の恩寵の泉源より道德衝動として善心湧出す、縁を待て始めて然るに非ず。

如何にとなれば恩寵は如來の機能にして如來より設置せられ、其本質内容は如來の一切慧と能とにして之に包括せらるゝ處の個人の靈は一員なり。この一切の内容を包括して措かざるは如來の恩寵なり。

如來は自己の根底たる絶對主體にしてこの根底より各自の恩寵として湧出すとすれば不待縁なり。

### 第五 有々力待縁 引自果義

何以故、由引現自果、是有義、雖待縁方生、然不生縁果、是有力義、即由此故、是待縁義。

有は積極的に善惡等の素質は種子は要素が自己の内容の實質となりて此には必ず其内面の伏力はやがて顯動態となるべきものなり。

例へば善惡等の性質は先天には天然性と及び遺傳等より其素性を受け、次に後天には家庭教育等の周囲の社會境遇に鍛鑄せられ、社會の感化を受けたるには相違なければ、善惡共に自己に何にも成り得べき性能ありても、其種子は遺傳または宿罪によりて各人の本質内容は善なるも惡なるもあり。其の外縁のために鍛せられたりとも自己に責任なしと云ふべからず。

惡の原因にして遺傳及び境遇の外縁によりてとすれば之を造る原因は世界に歸せざ

るべからず。然れども決して此の悪人に對して價值判断及びこれに對する動作は直接に其人に結ぶ所の實によりて價を拂ふ。

不良の果實を有する木は之が原因また他の事情の如何を問はず直に其木を伐り除くに至る。

悪人ありて余が元來自己が卑陋なる墮落せる社會の爲めに計らずも誘惑せられて、また悪友の誘惑に抵抗せざるが故に悲境に沈淪せりと云はゞ、やはり有本質の惡に誘惑に鈍化せられたる結果は自己に歸するに非らずや

#### 自由意志

動物は意志を用いれども意志の自由を有せず。動物は目前の衝動及び感覺に規定せらる。其の自己の内容に之を思慮疑惑決定なし。

かゝる意志は發達せる人間の特質なり。人は決意によりて其行爲を規定す。決意は思慮の結果なり人の種子たる本質より顯はるゝ思慮は其の可能なる行を自らの生活と一般の生活とつまり見合せて適宜に選む。

心靈の特質は外界に對する感情衝動にのみ規定せられずして自ら目的思想によりて自己を規定す。

心靈は目的思想中に全動力全生活を把住し全體の觀念よりして特殊の實行を決定す  
心靈は一切の精神生活を支配す。

恩寵開發し靈格となりしは全く遺傳恩寵及び客觀的理性及び神の觀念即ち恩寵等を充分に發展し靈化せんには外界の刺激によりて成就すべきものなるも成就したる結果は自己の靈格に歸す。

上求菩提下化衆生は自己以外の上下の縁によりて成ることを得べきも結果は自己の成佛即ち靈格となる。何人も其徳果を奪ふべきに非らず。

例せば一學生の大學を卒業するに至るまでには幾多の助成機關を要した外には學資を助け内面には學科に於る教授刺激等に資けられて正に業を卒へたるも自己に之を

得ん本質に素定あり。またこの刺激に對する精神の能動力ありて數多の學科を受容せしなれば之を助成機關に受くること多きに拘らず其結果は自己に歸す。

有々力自己本質に之を受容し得べき能動力なかりせば、いかに外部よりの刺激も如何ともすべきこと能はず。またいかに高等に形成すべき素質を有すとも外部の之を形成すべき資質助成の有なければ本質もまた何の功かあらん。

また本能に素質あるも有力なる外部の刺激に對する動力即ち勉強の力によらざれば効果を見ることなし。

種子—本質—人の身體及び精神を形成する本質要素に力ありて其力の顯動態となれば、  
現行—と云ふ。顯動して始めて善惡の結果を現はす。

有—積極。有—積極とは本質に一定したる積極的意志内容特質あり。善惡無記等の本質なり。

空—消極—本質は本空、即ち無定にして白紙の如く、善惡及び迷悟種々に成すべき性なりとす。

カ—とは伏力顯動力。能く刺激及び資縁によりて顯動し果を生すべき力なり。

昭和四年十月廿八日印刷	同
年七冊制は廢止	三十日發行
年拾貳冊 貳圓(郵稅共)	
編輯兼 山崎 辨成	
發行人	
印刷人 小林七太郎	東京市小石川區藤町五五
	電話小石川一四九五
發行所 東京市小石川區水道四二〇四四	
	ミオヤのひかり社
	振替東京六八五一番